向

井豊昭

1

閉めきったバスの窓にひたいをすりつけ、ミキ子は目をみはっていた。道にそった小高い山のつらなりが小さなうねりをみせて、どこまでも続いていく。うねりながら、山はいつの間にか道ぎりぎりに寄ってきては、道のはるかにまた遠ざかる。遠ざかった山と道の間には、カラマツの林が緑のない細い枝の広がりを青空の中に陰らせていた。ひからびたカシワの葉が雪の残る山を背中に陰ってみた

り、雪の下からむき出る山の茂みの枯れた色あいにすっぽりと重なってみせたりもする。稲の切株が残る田んぼが現われ、沙流川の流れが不意に目の下を横切りもした。川をおおう氷を割って水はまぶしく光っている。

ありふれた景色であり、ありふれた道であった。しかし、父と母に連れられて出かけるうれしさのあまり、ミキ子の心は躍っていた。躍るミキ子の心に合わせ、景色もまた息づくのだ。

学校へ通う子ども達のためにいつも満員になるはずの朝のバスではあったが、前の日から始まった春の休みのために客は十人たらずのものであった。ミキ子もまた、一年生の修業証書をもらったばかりである。

二本のお下げ髪をたばねる輪ゴムの上にあしらったリボンを、母は隣の席からぼんやり見つめていた。リボンといっても、それはミキ子の古びたエプロンのひもを切ったもので ある。鋏で切って、そのまま結んだひものほ

つれを見つめていると、母はこれから行く病院でのことがいっそう心配になってくるのだった。

「のど、かわいたなし」

前の席に座っていたミキ子の父が一人言をつぶやいた。胃の痛みを訴えて、今日で三度目の病院通いである。胃癌のためだと飲み仲間におどかされ、わざわざ、遠い苫小牧市の病院に出かけたのは一週間ほど前のことであった。初めの日、医者に首をかしげられ、二度目にはバリウムを飲まされた。胃カメラを飲まなければならない三度目の今日、妻は居ても立ってもおられなくなり、とうとう一家で出かけることになったのだ。検査のため、朝飯は勿論、水さえも飲むことを許されない夫は、のどのかわきをもてあましていた。前の夜、やけくそになってあおった焼酎のため、夫は二日酔いのありさまだった。

山のつらなりが途絶え、広々とした田んぼがミキ子の目に入ってきた。放牧地もあり、

四・五頭のサラブレッドがゆったりと動いている。手前を流れる沙流川の川幅は広がり、氷の光はもうどこにもなかった。

「ハヨピラ！」

ミキ子が大きな声を出した。小高い山のつらなりが再び始まる、そのはじっこの崖の斜面が真白に彩られている。雪のためではない。コンクリートの階段と、ピラミッドのようにそびえたつ塔のためなのだ。

塔の先には、赤い輪で太陽のしるしが描かれている。塔の中ほど、右手には、宇宙飛行士のめがねのようなものをつけた大きな土偶のレリーフがはめ込まれ、左手には、アイヌの文化の神、オキクルミのレリーフがあった。しっと下の右手には同じ神を仰いでいるアイヌのモザイクの壁画もあり、そのすぐ下には、黄色く塗った石を並べてエトーロプ（入口）という文字が枯草の間から浮き出ていた。草が緑の色をとりもどしたとき、その文字はもっとはなやかに浮き出るはずであり、その文字

の左手、塔の正面に輪を重ねて広がっている枯れた花株も緑の中に映えるはずであった。

ここ北海道日高・ハヨピラは、かつて日本古代原住民アイヌの故郷にして、古来、その文化指導者であり、アイヌの始祖とうたわれたオキクルミカムイが宇宙より降臨の聖地として、また文化の中心たる古き都として、今日まで人々に尊ばれて来たきわめて由緒深き処である。

今や新しい「宇宙時代」を迎え、すでに人類が生存する星が宇宙銀河系には無数に存在するといわれる今日、我々のロケットよりはるかに進歩せる高性能飛行物体、つまり一般に空飛ぶ円盤（米空軍公式名称によるUFO（ユーフォー））と呼ばれる飛行物体がはるかな宇宙よりこの地球に来訪することはまさに疑いなき事実である。

かくて現代のみならず古代における航空宇宙の科学的研究の結果、宇宙からの来訪者の

搭乗せる輝ける宇宙機は現代では〝空飛ぶ円盤〟と呼ばれ、古代では「シンタ」や「太陽円盤」等と称せられ、まさしく我々地球人類の歴史と共にあったことが明らかにされた。

第19回国際空飛ぶ円盤デー記念、インターナショナル・スカイスカウト（ISS）発足記念として、ここアイヌの聖地ハヨピラに建設された「太陽のピラミッド」はまさに民族をこえ、国境をこえ、思想をこえて、すべての地球人類が一つになって、宇宙よりかって来訪し、今日再び訪れ来たる〝スカイ・ピープル〟に対する大いなる感謝と歓迎と敬意のシンボルである。

CBAインターナショナルという団体のパンフレットの中の文である。その団体の手で、ハヨピラとよばれる崖の斜面に塔が建てられたのは十年ほど前のことであった。しかし、シンタに乗り、天の上からオキクルミがそこにおりたったという語りつたえをミキ子は知

らない。ミキ子の父や母がそれを知ったのも、塔ができ、そこが人の目をひくようになってからである。そして、ミキ子が知っている中身といえば、そこに昔、空飛ぶ円盤がおりてきたのだということだけであった。学校の先生が教えてくれたのだ。前の年の秋、学校ぐるみで、苫小牧市のはずれにあるウトナイ湖へ出かけた途中のバスの中でのことだった。

「かあさん、今度、ここへ来よう」

振り返ったミキ子のお下げ髪が、母の頭にかぶせたスカーフを払った。

「こんなとこ、つまんないよ」と、母はずれたスカーフを直しながら言った。

「ブランコもあるよ。あっ、あれもある！」

まだ一度も乗ったことのないグローブジャングルを塔のかたわらの遊園地に見つけ、ミキ子は大きな声をたてた。グローブジャングルの下には、戸を閉ざした売店も見える。観光シーズンにはまだ早く、人の影はどこにも

なかった。

沙流川の長い橋をバスが渡り、ハヨピラの姿は、ミキ子の右手の窓から正面の窓に移った。自分の前の父の頭をよけるため、ミキ子は体をかしげた。正面の窓にはもうグローブジャングルはなく、山のすその枯れた茂みが大きく映っている。そして、それはたちまちバスの右手に移り、正面には、アイヌの都だった平取の町並みが見えてきた。

「アー、行ってしまったア！」

名残惜しそうに振り返るミキ子のうなじを母は見つめていた。うなじをおおう生毛の厚みが増している。生まれついた毛深さのために、母も父も嫌な思いをしてきたものだった。そこにアイヌだけが住んでいたとき、自分の毛深かさを恥じることなどありはしなかったのだが——

母がまだ娘のころだった。ぐれた心をもてあまし、ごろごろと寝ころがっていたときが

ある。

「よし子！　このニイクル女！」

見るに見かねて呶鳴りつけたのは、留守番役のじいさんだった。

「聞きたくない！」と、よし子は耳をふさぎながら立ちあがった。ニイクルという言葉の意味をよし子が知っていたわけではない。よし子が聞きたくなかったのは、それがアイヌの言葉であったからだ。

「南の星とおんなじだ！」

じいさんは、よし子の耳もとに首を突きだし、また呶鳴った。耳をふさぐよし子の手につばがかかる。じいさんの濡れた唇の下からたれさがる白いあご髭にも、つばは糸をひいていた。それは、なめくじの痕のようにいやらしかった。

よし子は思わず裏口から飛びだした。草むらに咲きみだれる月見草がまぶしい。目をくらませてしまったかのように、よし子の体は草むらの中にうずくまった。赤ん坊のように

泣き叫ぶ声とともに月見草がゆれた。

泣き疲れ、よし子は体を起こした。伸び盛りの草むらは、首の高さまでもあった。隠れがを求めるように、よし子は草をかきわけながら奥へ進んだ。

蝉が鳴き、水の流れる音がする。草むらが不意に切れ、林の中によし子はいた。

唇の先で、よし子は沢の水をすすった。心を冷ますように、水は気持ちよく喉を流れた。腐った落ち葉の積み重なりが沢のまわりで濡れている。乾いた場所を見つけ、よし子はあお向けに寝そべった。

乾いたはずの落ち葉を通して、土の湿り気が背中に伝わった。枝を張り、葉を重ね、林は光に乏しい。すぐ目の上の枝の葉を、よし子はじっと見つめていた。夏の初めの強い光に透かされて緑はあざやかに輝いている。命のように芯い葉の輝きを縫って、細い葉の筋は光を拒み陰っていた。命の芯を見つめるように、よし子は細い陰りを目でたどった。

裏庭の方角から鋸の音がする。薪にする流れ木を切るじいさんのしわざだった。もう冬の支度をしているのだ。規則正しい鋸の音に合わせながら、よし子はつぶやいていた。

「ニイクル、ニイクル、ニイクル……」

せっかくの冬の心配に関わらず、じいさんは、ひと月あとの夏の盛りに死んでしまった。脳卒中である。

自分の死と一緒にじいさんが背負っていったアイヌの語り伝えの中には、ハヨピラにおりたったオキクルミの話もある。

オキクルミの父は雷の神さまであり、母はニシの木の神さまだったという。ある日、天の神さま達が集まって、天国の門から、はるか下の人間の世界を見ていると、美しい娘が二人見えた。神さま達は娘に見とれていたが、みんなの前に出て特に一番見とれていた雷の神さまを、わざと後ろから、娘の上に突き落としてしまった。その娘が二シの木の神さま

で、二人の娘は、そのとき、男の子をそれぞれはらんだという。一人の男の子はポイヤウンペという戦に強い英雄になり、もう一人の男の子はオキクルミになった。

ニレの木は火もちのいい木である。じいさんが子どものころは、炉の中にニレの枯木を丸太のまま入れ、ほかの焚木をとりあわせて焚火をしたものだった。雷を受けて燃えあがるニレの木は、マッチもなく、こすり木さえも知らなかった古い時代の人達にとって、文化の火であり、信仰の相手であったろう。オキクルミがハヨピラにおりたったとき、着物のすそがきらきらと火を噴き、刀のこじりも燃えていたというが、それらをアイヌは、ニレの木の皮などの繊維で作ったものである。

CBAインターナショナルによれば空飛ぶ円盤に違いないというシンタという乗り物の形は、語り伝えの中にはない。しかし、オキクルミへの信仰がアイヌの生活と関わって生まれたように、シンタもまたアイヌの生活の

中にあった。シンタというのは、赤ん坊のゆり籠のことなのだ。籠というより、形は橋に似ている。板で作ったそのシンタに四本の紐をつけ、それをひとつに合わせて天井に結ぶのだ。宙にゆれるシンタの軋んだ紐の音は、風を切って空を飛ぶオキクルミの物音を思わせる。

空からおりてきたオキクルミの乗り物が、子どものゆり籠の名を持っているということはどういうことなのだろう。それは、例えば、小さな子ども達を指して「天国はこのような者の国である」と言ったイエスの言葉に通じるのだろうか。

イエス、といえば、オキクルミの語り伝えには聖書を思わせるものがまだある。アイヌに文化を伝えたという オキクルミは、やがてアイヌの堕落に怒って天へ帰ってしまうのだが、その原因についてはいくつかの言い伝えがあり、その一つは、初め、親指の先ほどのくぼみに入るだけのヒエでも鍋一杯になるほ

のだ。

これらの言い伝えは、智恵の木の実を食べたためにエデンの園を追われる、あの創世紀にどこか似通っている。そして、創世紀の神の怒りがキリストを通してやわらげられるように、アイヌもまた、まったく見捨てられたわけではなかったのだ。オキクルミはアイヌの国を去るとき、沙流川の川口に雷の音がしたら、再び自分が訪れたのだと思えという言葉を残していった。

2

螢光灯の光を受けて、フローリングの床は冷たく反射をしていた。待合いのソファーに身をかがめ、夫を待つよし子である。その隣では、ミキ子が、病院の売店で買ったポッキーチョコをかじっていた。手も口も、ほっぺたまでも、とけたチョコレートが汚している。

舌を鳴らしながら最後の一本を喉に落とす

と、ミキ子は空になった箱のやり場に困っていた。片隅の大きなごみ入れが、ミキ子の目につかなかったわけではない。しかし、緑の色に彩られたそのプリキの入れ物の使いみちは、ミキ子には分らなかった。

左に座った母の目から遠ざけるように、ミキ子はソファーの右側に空箱を置こうとした。しかし、診察を待つ人々に占められ、ソファーの上にゆとりはない。隣に座った若い娘のスカートと、ミキ子のスカートにはさまれるように、空箱はミキ子の手を離れた。

チョコレートの汚れをつけた空箱を娘はにらみつけた。週刊誌を開きながらミキ子親子を盗み見していた娘は、ミキ子の手の動きを知っていたのだ。

顔をしかめ、娘は立ちあがると、向かいの壁にもたれた。相変らず週刊誌を開きながら、娘は盗み見を続けた。娘だけではない。ミキ子親子のまわりからは、二人を気にするたくさんの目が、代わる代わる注がれていた。長

いまつ毛、彫りの深い顔のつくり、二人の親子を見るならば、その血に流れているものは明らかであった。

隣の席の思わぬゆとりに、ミキ子の動きは大きくなった。スリッパを足から落とし、ソファーにあがると、その背中にミキ子は両手をかけた。鉄棒をするように二つの足がはねあがる。タイツの股のほころびから白いものがのぞいた。つくろいごとを自分でできる年頃に、やがてミキ子はなるだろう。しかし、タイツを透かして厚く生えだす自分の毛を、ミキ子はスラックスで隠すようにもなるのだろう。

スカートをはくことを忘れてしまった母の足が床に突っ張っている。ソファーにかがむ硬い姿勢とは裏腹に、よし子の心は動いていた。三十年のくらしの中で、見つめられ、さげすまれ、タコの寄った心の動きは、ナマコのようなものではあった。それもまた、オキルドに甘いた罰なのだろうか。罰はあまり

はしつこくあまりは備っている。

突き刺さった刃物の切れ目から、ナマコは水を噴きだしていた。人の目よりももっと鋭い死の刃物が、よし子を突き刺している。夫の死体のそばで黒い紋付を着て座る自分の姿を、よし子は思い浮かべていた。しらふで抱いてくれたことなどない酒好きの夫、木こりの夫の鉞のように荒々しい夜の手つき――それはよし子を死から守ろうとするものであったかのように感じながら、夫との思い出をよし子はたどっていた。

じいさんの弔いの日が、よし子の心に浮きあがってくる。

蝉が激しく鳴く日だった。ごちそうを広げる人々の騒がしさから外れ、よし子は一人、焼き場の外に出た。墓石の群れが鏡のように光を反射する。骨を待つ、よし子の家の墓石もその中にあった。

今さら虚勢をはろうとする墓石達を避ける

ように、よし子は足早に細い道の奥へ抜けて行った。盆を前にして、あたりの草は刈られている。

墓石の列が途絶え、丈の高い草むらがよし子の前で道をおおった。草むらのあちこちには、腐った棒杭が立っている。ある棒杭は槍の形に先を削られ、ある棒杭は針の形の頭を持っていた。頭の穴に結ばれた黒い布の名残が枯葉のようにこわばっている。

かってアイヌが、アイヌの風習で葬られた墓場の痕なのだ。その棒杭の下に土葬されたアイヌは、その棒杭を杖にして天へ昇っていくのだった。槍は男、針は女のものである。イ・ルラ・カムイ、それを送る神という名を持つその棒杭は、死んだ者や家の名を刻み込み、その存在を言い張るかのような墓石とはまったく違う世界のものであった。墓場はつつしみ深く、名を捨てた姿をさらけだしている。

アイヌの信仰の意味など知らないよし子の

目から、なぜか涙が流れていた。それは、じいさんが死んでから、初めて見せた涙であった。

「おい、骨あげだぞオイ！」

よし子を呼ぶ声が遠くでする。隣の家の和男だった。酒臭い息を吐きながら、和男は焼き場の前であたりを見まわした。

よし子の姿は見えなかった。和男は首をかしげると小道を歩きだした。向こうの草むらに黒い紋付の背中が見える。その紋付の色あいは、イ・ルラ・カムイに残された色あせた布の色と重なっていた。

「骨あげだ」と、よし子の後ろで和男は小さく言った。

顔をそむけながら、よし子は和男の体をかわして走り抜けていった。あっけにとられ、和男はよし子の背中を見送っていた。草履の音が和男の耳から遠ざかったとき、和男は後を追ってゆっくり歩きだした。よし子はもういないのに、イ・ルラ・カムイと、そこに立

っていたよし子の姿が、和男の歩みになぜか足かせをかけていた。

蝉の鳴声とまざりながら、鐘の音が響いてくる。ネクタイをつけ、冬物の背広を着込んだ和男の体は汗を噴いていた。ひたいの汗を手でぬぐい、和男は焼き場の中に入った。

熱い空気が和男の頬をなぐりつけ、和男は思わず立ち止まった。熱を散らす鉄板の上にじいさんの骨がある。頭のかたまり、胸のかたまり、腰のかたまり――それぞれの部分を見せ、骨はかろうじて人の形を保っていた。もし、誰かが間違って、イ・ルラ・カムイをじいさんにあずけたら、じいさんは戸惑うことだろう。握る手も、天へ向かう足も、すべては骨に加工され、小さな骨箱に押し込められてしまうのだから。

加工場の熱い空気にへこたれながら、人々は箸を持っていた。おそれげもなく死をつまみ、死を骨箱に隠していた。

「よし子、早く拾え」

蟻のようにたかる人々の間から、よし子の父が振り向いた。

「なんだか、じいちゃんがかわいそう」

むらがりから離れ、よし子はつぶやいた。

「かわいそうだな」

よし子のそばで和男が言った。二人のやりとりは、二人の愛の初まりだった。

「あっ、とうちゃんが来た！」

ミキ子の叫びに、よし子は立ちあがった。近づいてくる和男の顔に、よし子は目をみはる。面長だった和男の頬の髭が、むくんだ広さに広がっていた。胃カメラを押し込められたためなのだ。

「どうした？」

よし子の問いに和男は口を開いた。隠し切れない喜びを大声で伝えているはずの和男であった。しかし、麻酔の切れない和男の唇はほとんど開かなかった。

「えっ？」と、よし子は問い返した。

和男の唇が相変らずの開き方をしている。
「大丈夫だったの？」
ようやく聞きとった和男の言葉に、よし子は念を押した。和男は大きくうなずきながら、また唇を開いた。
「胃癌じゃない？　ただの胃炎だって？」
よし子はまた念を押し、和男はまたうなずいた。
「ごはん食べに行こう！」
よし子の声は弾んでいた。

「ワーイ！」
ミキ子が床の上ではねる。おおっぴらに注がれてきた人々の目を、よし子も和男も、感じるゆとりなどありはしなかった。

3

「雨、降んないかなあ」
デパートを出ると、ミキ子は空を見あげながら言った。ミキ子の言葉に応えるような空ではない。

「雨降れ！　雨降れ！」と、ミキ子は空に向かって右手を振った。デパートの包み紙から突き出た傘の柄をミキ子の手は握っている。

「危ねえなア！」

傘の先でヤッケの肩を叩かれ、和男は呟いった。麻酔でもつれた和男の言葉は、もうとっくに戻っている。

大きな声が、道を行きかう人々を振り向かせた。向けた目の奥から、尖った視線が注がれる。それはもう和男という人間の声のせいではなく、ミキ子という子どものしわざのせいでもない。人混みの真中で傘を振り、大声を出す、がさつなアイヌの親子に向けられた視線であった。

ミキ子の傘をよし子はものも言わずにひったくった。のどを破るような泣き声が人々の視線をいっそう引きつけた。

よし子はミキ子を抱きあげ、足早に歩きだした。のぼせた頭は、よし子の足を駅の逆へ導いていく。舌を打ち、和男はゆっくりと二

人の方向へ従った。

青い信号の立つ十字路を渡ると人の流れが途絶えた。ショーウインドウに彩られた商店街はもう終り、小学校や市民会館が見えている。腕の疲れを感じ、よし子はミキ子をおろした。泣き叫ぶミキ子の声は止まらない。

人通りのなくなった道を、自分の天下のように和男が走ってくる。よし子をにらみつけ、よし子の持った赤い傘を和男は取りあげると、腰をかがめてミキ子に言った。

「悪いかあさんだなあ、ほら、傘を返すからな」

上目づかいで見上げるミキ子の手に、和男は傘を押しつけた。両手で傘を持ちながら、ミキ子の泣き声は少しずつおさまっていく。

「自分ばかりいいコになってし」と、よし子はすねるように和男に言った。ひょこんと頭を下げ、和男の目は笑っていた。

「変なとこへ来てしまったな。駅はあっちだぞ」

先に立って和男が歩きだそうとしたとき、ミキ子は後ずさりをした。

「お前、うちに帰んないのかい！」と、よし子は甲高い声で言った。

ミキ子はこっくりをした。

「帰んないで、どうするのさ！」

「あそこへ行く」と、ミキ子は小さな声で言った。ミキ子の指さす方角は市民会館の建物である。その建物の後ろには、青少年会館の高いドームが見えていた。

遠いドームを和男もよし子も気がつかなかった。ミキ子もまた、そこが初めての場所ならば気がつくこともなかったろう。しかし、昨年の秋、学校の見学旅行で苫小牧に来たミキ子は、青少年会館でのたのしいひとときをドームとともに思いだしてしまったのだ。

「あんなとこに何あるのさ！」と、よし子の声は相変らずだ。

「星。遊ぶものも一杯」

「星？」と、和男が言った。

「うん」
「馬鹿」
「ほんとだよ。学校で来たんだもの」
「見学旅行でかい？」と、よし子の声はいしばかりやわらいでいた。
「うん」
「なんか、勉強になるもんがあるんでないか？　行ってみよう」と、和男はすぐそばの歩道橋の階段に足をかけた。はしゃいだ足音が和男を追い越した。

歩道橋を渡り、市民会館の横のせまい道をミキ子に導かれながら、二人は歩いていった。道の両側に残った雪はうらうらかな光を受けて、舗装のない道をぬかるみに変えている。アノラックの背中にまで泥をはねあげながら、ミキ子は弾むように歩いていく。
「おいで、ここだよ！」
分厚いガラスのドアを背中で押し、ミキ子が呼んでいる。
「おい、待て待て！」

和男の声は届いたが、ミキ子の姿はドアの向こうに消えてしまった。

「勝手に入っていいんだろうか？」

「苫小牧市立青少年会館だってさ」と、よし子は建物を見あげながら言った。

「青少年なら、俺達、入れるのか？」

「さあ」

二人は、まじめな顔つきで、受付の小窓の前に立っていた。

「お前、聞いてみろ」

「どうしてさ、男が聞くもんだよ」

「いいから聞けって」

言い捨てると、和男はさっさとそこを離れた。

ミキ子の消えたドアにひたいをすりつけて、和男は中をのぞいた。右に広がる建物の中は、和男の場所から見えなかった。

「ダダだってさ！」

はしゃいだ声とともに、よし子の手がドアを押した。

建物の中に、ミキ子の姿は見えない。ガラスの仕切りが部屋の真中に立ちはだかっていた。

「丸木舟か」と、和男が吐き捨てるように言う。

仕切りの向こうに納まった数艘の丸木舟がアイヌのものであることは明らかであった。部屋の壁ぎわにもガラスの仕切りは張りめぐらされ、アイヌの文様をあしらった着物や、道具がかざられている。螢光灯の冷たい光に照らされた郷土資料室には、あの病院の雰囲気がただよっていた。

「早く！　お星さまがうつるよ！」

ミキ子の声がする。二階に通じる階段の上から、ミキ子が傘を振りかざしていた。

「一人で勝手に歩けばだめだよ！」

叱りつけると、よし子はそこから逃げるように階段を昇った。同じように、和男も後を追った。

二階に続く階段を昇りきると、大人の身の

丈ほどのロボットが見えた。人工衛星のパノラマや、小さなクレーンも見え、あちらこちらに子ども達がたかっている。

「こっちだよ！」

開き放しのドアの手前でミキ子が呼んだ。薄暗いドアの向こうに映画館のような椅子の背中が見えている。

ドアの入口の机のそばには番人が立っていた。机の前に貼った紙には入場料が書いてある。

和男は財布を開いた。とりすましたの顔つきで銭をはらった和男だが、何がこれから始まるのか見当もつかなかった。

入った部屋の真中には、見たことのない大きな器械がすえつけてある。人のまばらな椅子が器械を囲んで並び、ミキ子はさっさと座っていた。

和男とよし子は、ミキ子にならった。もたれた背中が思いきり後ろに沈み、二人は小さな声をたてた。顔の上では、丸い天井が白く

光っている。

「あそこに、映画でもうつるのか？」

首を曲げて、和男はミキ子に聞いた。

「星だよ」

「星の映画か？」

「ううん、星」

「なんだろう、ここ？」と、和男はよし子に言った。

「なんだろう、ここ？」と、よし子も和男に言った。

青い光が天井に染みはじめ、いつの間にか雲一つない空に変っていく。

「きれいだねえ、かあさん」と、ミキ子は隣の席に声をかけた。

「きれいだねえ」と、よし子は目をみはった。

「なんだか、面白そうだぞ」と、和男は尻を動かして座り直った。

光は空に集中し、おたがいの表情はもう見えない。解説をする男の声が頭の上からおごそかに響き、空は次第に暮れていった。

空の奥から染みでるように、星の輝きが現われてくる。ミキ子がもっと小さかったころ、ミキ子と一緒に見た空を和男はふと思いだした。その夜、おしっこに連れていこうとするよし子の手からミキ子を奪い、和男は外に出たものだった。

「お月さま、いっぱい！」

夜空を指さし、ミキ子は和男の腕の中でそりあがった。あわてて腕に力を入れ、和男は空を見あげた。酔いのまわった和男の目に、星の光はしぶきのようにかかってくる。初めてそれを見たもののように、和男は星にみとれていた。

胸のあたりに、ほのかなぬくもりが伝わってくる。腕の中でミキ子のたれ流したおしっこだった。

「東の空をごらんください。スバルとよばれる星座は、アイヌの伝説の中にもニイグルという名前で出てきます。ニイグルとは怠け者

という意味で、六人の怠け者の娘のことを指しています。三人の働き者の男兄弟が、ある日、娘達に言ったそうです。『毎日、ぶらぶら遊んでばかりいないで、少し畑でも耕したらどうだ』『畑なんて耕したら、このきれいな手が汚くなるよ』『汚くなったら、川へ行って洗ったらいいだろう』『川なんかで手を洗ったら、川へ落ちて流されるよ』『流されたら草の葉につかまって上ればいいだろう』『草の葉なんかにつかまったら、手が切れるよ』『手が切れたら、しばったらいいだろう』『しばっても、胸がドキドキしてせつないよ』『このニイグル！』三人の男は怒って娘達を追いかけました。六人の娘は舟に乗って逃げたので、三人の男も舟を出して追いかけましたが、どうしても追いつけません。今でもニイグル星は畑の忙しい夏の間は隠れていて、冬になって畑が終ると東の空に現われてきます。オリオンの三つ星は、それを追いかける三人の兄弟の姿だということです」

解説と一緒に、二般の丸木舟と、それをこぐアイヌが大きく天井にうつしだされる。よし子は息をつまらせていた。

（じいさんの目の中にも、空はこんなふうにうつってたんだろうか？　ただの星の散らばりから、あざやかな物語を頭の中に描いてたんだろうか？）

ミキ子の寝息が聞こえてくる。

バスの窓に雨の粒が流れだした。

「わあっ、雨だア！」

包み紙のとれてしまった傘の柄を握り、ミキ子は脱をはしゃがせた。傘の先がバスの床を突っつく。ミキ子のはしゃぎをあおるように、雨は勢いを増した。

闇は窓を塗りつぶし、鏡のようにミキ子の顔をうつしだしていた。濡れたガラスは、ミキ子の顔を歪めている。ミキ子は不思議に思った。床を突っつく傘の音が止まり、雨の音